

Title	知覚と行動 : ベルクソン哲学に対するギブソン心理学の有効性
Author(s)	中村, 雅之
Citation	年報人間科学. 7 P.69-P.82
Issue Date	1986
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/11084
DOI	10.18910/11084
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九八六年三月）

『年報人間科学』第七号六九頁―八二頁

知覚と行動

——ベルクソン哲学に対するギブソン心理学の有効性——

中村雅之

知覚と行動

—ベルクソン哲学に対するギブソン心理学の有効性—

古来、知覚をめぐる哲学的論稿は数知れない。その多くは知覚においてわれわれの認識機能——概念、判断、推論、解釈など——の果す役割を強調している。それに対して、知覚者の行動が果す役割を主題としたものは少ないと思われる。本稿で取り上げるベルクソンの知覚論はそのような数少ない例の一つである。

われわれはベルクソンが知覚と行動との本質的結びつきをどのよう
に分析したかを明らかにするつもりである。その作業は現代の知
覚心理学者ギブソンとの比較を通じて進められる。本論で示すよう
に、ギブソンは知覚において行動が不可欠の役割を果すとする点で、
ベルクソンと共通の枠組を持っているからである。そこで本稿の第
一の目標は、ベルクソンとギブソンが共有するこのような枠組と、
そこから導かれる共通の論点を明らかにすることである。今触れた
ように、両者の知覚論は知覚と行動は切り離しえないとする点で、
他とは際立つ特徴を示している。それゆえ、彼らのこうした独自の
論点を浮彫りにするだけでも十分意義があると考えられる。さらに、
ギブソンを通じて、ベルクソンの知覚論を現代の知覚論の文脈に導
き入れることも可能になるだろう。第二の目標は、ベルクソン、ギ
ブソン流の知覚論が、哲学的知覚論に対して持つ含意を明らかにす

ることである。これは最後に触れることになるだろう。

一

ベルクソンの知覚論は、その出発点からすでに独自の歩みを示
している。彼は知覚を説明するのに、われわれ知覚者についての分析
からではなく、物質界の措定から話を始めるのだ。彼はやがてこの
物質界からわれわれ（や動物）の身体を浮かび上げさせ、物質界と
身体との独特の関係の仕方から、知覚を発生的に説明しようとする
のである。

ベルクソンは、自然科学が物質界（彼はこれを「イマージュの総
体」⁽³⁾と呼ぶ）に対して与える描写をそのまま採用している。すな
わち、そこでは各物体が「私が自然法則と呼ぶ一定不変の法則に従
って、そのあらゆる要素的部分において作用し反作用し合っている」
([M.N. II] のである。もしこれらの法則を完全に知り尽した科学が
成立したとすれば、それは各物体の振舞いを余すところなく計算し
予見することができるはずである。従って、この世界では、原理的
にはすべてが確定されており、不確定の要素が入り込む隙間はない。

ところがわれわれはここに、他の物体とは明らかに異なった振舞い方をする物体を見分けることができる。すなわち、われわれ（や動物）の身体である。なぜなら、身体はその周囲にある惰性的物体とは違って、「受け取ったものの返し方がある程度選んでいるように思える」(MM, 14)からだ。惰性的な物体の場合、被った作用に対する反作用の返し方は、自然法則によって定められている唯一の仕方しかない。またその反作用は必ず発現される。これに対して、われわれの身体の反応は可能なくつかの選択肢の中から選択されている。しかもこの選択の結果は、必ずしも現実の反応となつて発現するわけではない。例えば、身体の応答は一時延期されることがある。その場合には、受け取られた刺激は現実的行動へと發展することなく、生まれかけの様々な運動へと散逸してしまうのだ。

こうした選択機能の生理学的基礎は、言うまでもなく脳を中枢とする神経系にある。脳の構造が複雑になり、刺激と反応の間に介在する神経細胞の数が増えれば増えるほど、またそれらの出す軸索突起の組み合わせが多くなればなるほど、同じ刺激に対して開かれる運動もますます多種多様になるだろう。これの意味するところは、とりもなおさず行動の際われわれに委ねられる選択の余地が増大したということなのである。中枢神経系はこうした選択を実現するための装置である。このことは、中枢神経系を脊髄の反射機能と比較してみれば、一層明瞭になるだろう。反射運動には選択の余地はなく、刺激に対してどのような応答をするかはあらかじめ定められている。また待機もない。こうしてベルクソンによれば、脳とは「受

け取られた運動に関しては分解の道具であり、遂行される運動に関しては選択の道具である」(MM, 26-27)とされるのである。

以上で、自然法則に支配された物質界と、その中で行動の選択をこととする身体とが素描された。前者はすでに触れたようにすべてが確定された世界である。身体はこの確定された世界に、選択というかたちで不確定の要素を導入することになる。この点が以上の叙述の眼目である。ベルクソンはこの行動の不確定性から、知覚を説明しようとする。

しかしその前に、彼は知覚の条件を次の二点で単純化することから成る予備作業を設けている。まず実際の知覚から記憶の寄与する分が取り除かれる。ベルクソンにとっては記憶に浸透されていない知覚は現実にはないのだが、彼はこれを一旦括弧に入れ、ひたすら現在に没入する、権利上存在するような知覚を想定するのである。

第二に、身体が現実の延長を持たない数学的点的ようなものと仮定される。この二つの制限は、知覚にいわば後から付け加わった主観的契機の排除を目指している。ベルクソンにとって記憶とは精神の別名であると言つてほばさしつかえない。それゆえ、第一の制限が知覚から主観的側面を排除することになるのは明らかだろう。第二の制限は、身体に対する現実的作用を排除するためのものである。

実際には延長を持つ身体が被る現実的作用は、ベルクソンによって（痛みを代表とする）感情感覚と呼ばれるものを引き起す。そしてこれも知覚に混入する不純物として考察から一旦除かれるのである。こうした予備作業は、事物とは本性的に異なる知覚像によつて知覚

を説明しようとしたり、知覚はまず第一に認識を目指すものである
としたりする立場を退けようとする彼の意図の具体的現われに他な
らない。ベルクソンは知覚から、本質的でない側面を排除し、知覚
を純粹な形で取り出すために主観的、認識的要素を捨象するのであ
り、この意味で右の制限を施した知覚を彼は「純粹知覚」と呼ぶの
である。純粹知覚はまた、個々の人々の具体的知覚の基底にある「非
人格的知覚」とも呼ばれている。(以下の論述では、とくに断わり書
きのない場合、「知覚」は「純粹知覚」を指すものとする。)

こうした条件を設定した上で、ベルクソンは物質の存在とその知
覚との関係を、あらまし次のように推理してゆく。冒頭で、彼の知
覚論の出発点の独自性ということを述べたが、この推理も普通とは
逆の手順を踏む。哲学的知覚論では、物質の知覚(表象)とはその
存在に付け加えられる何ものかだと考えられるのが普通である。例
えば、同じ対象であっても、見る角度により、周囲の照明により、
対象との距離により、対象の「見え」はさまざまに変化する。ここ
から、同一の対象に対して、われわれがそれとは別の「見え」、知覚
像など(呼び方はどのようなものでもよい)を経験する、これが知
覚の基本構造だと推理されてきたのである。ベルクソンの推理はこ
れとまったく逆である。彼は、物質の知覚(表象)とは物質の存在に付
け加えられる何ものかではなく、反対にそこからあるものを取り除
いた結果に他ならないと考えたのである。つまり、物質の存在から
その知覚への移行は、増加ではなく減少によってなされるとされた
のである。そして、外的対象から捨象される側面とは、もちろん恣

意的に決められるのではなく、生体の利害にかかわりのない側面で
ある。ところで、有意的な運動能力を持つ生物がこの世界に出現し
た時、まさにこのことが可能になったのだとベルクソンは言う。

「もし生物が宇宙において(不確定の中心)を構成し、この不確定
性の程度が生物の機能の数と高まりによって測られるならば、生
物がただ現存するだけで、その機能に関わりのない、対象の側面
が削除されることが可能になると考えられる。」(MM, 33)

そしてこの削除自体によって、対象の残りの側面は、言わば周囲
から浮彫りになる。ベルクソンによれば、われわれの知覚の基本構
造はまさにこのようなものである。一言で言えば、事物につ
いてのわれわれの知覚は「われわれの欲求、より一般的にはわれわ
れの機能にかかわりのないものの排除から結果する」(MM, 35)の
である。つまり、(視覚の場合)外的対象の相貌はわれわれにとって
の利益または脅威を表わしている。そして外的対象とわれわれとの
距離は、この利益または脅威が現実のものとなるまでの時間の多少
を表わしているのである。同じことを対象ではなくわれわれの側か
ら表現すれば、知覚は「物体に働きかけるわれわれの行動の尺度で
ある」(Ibid.)と言える。対象のもたらす利害が、対象に対するわれ
われの行動と密接に関係していることは、食物摂取という行動を考
えてみても明らかだろう。それゆえ、対象の知覚は生物が対象に及
ぼしうる影響、すなわち可能的行動を言わば「反射」しているとも
表現されるのである。

このように、知覚は対象のある側面の排除から結果するのだから、

われわれは対象のごく一部を知覚するのみである。しかし、こうした部分性がわれわれの意識的知覚の本質なのである。「意識的に知覚するとは選択することを意味し、意識とは何よりもまずこの実際的弁別に存するのだ」(MM, 48)。逆に言えば、自分を取り巻くあらゆる点からのあらゆる影響を知覚するとは、結局何も知覚しないことに等しいだろう。以上のすべてを集約するのが次の命題である。物質にとつては「あることと、意識的に知覚されることとの間には、たんに程度の相違があるだけで本性の相違はない」(MM, 35)。なぜなら、われわれが知覚するものは、われわれの利害に関わる対象の側面であつて、対象そのものと本性的あるいは質的に異なる何ものかではないからだ。

以上がベルクソンの知覚論の概略である。そこではすべてが行動(ただし可能的行動)の文脈において語られており、認識に関わる用語——概念、判断、推論、解釈など——は一切用いられていないという点を強調しなければならない。身体のうちで起ることは行動にかかわることであり、またそれに尽きる。脳を中心とする神経系は、認識のためではなく、行動のために働くのである。それゆゑ身体は、あるいはより限定して脳は表象を生み出すものではない。脳は「表象の過程とは完全に無縁なまま」なのだ。もちろん、われわれの判断や推論が知覚に基づいて為される場合があることを、ベルクソンは否定しているわけではない。しかしこうした判断や推論の基礎としての知覚それ自体は認識を目指すものではないということ——これが知覚に対する彼の基本的立場なのである。認識的、主観的契機

は、記憶や感情感覚という形で後から純粹知覚に付け加わるものとされるのだ。この基本的立場は、例えば次のように表現されている。「さてこの二つの学説〔観念論と實在論〕の底にあるものを掘り下げてみると、そこに共通の要請が見出されるだろう。それは次のように定式化される。すなわち、知覚はまったく思弁的な関心を持つていて、それは純粹認識である、とされているのだ。(…)この二つの学説いづれにとつても、知覚するとは何よりもまず認識することを意味するのである。」

ところで、この要請こそわれわれが異議を唱えるものである。」(MM, 24。〔〕内は引用者。)

「(…)知覚もまた純粹認識へと向うのではなく、行動へと向うと考えるべきではないだろうか。」(MM, 27。)

行動の文脈から知覚を捉えるとはまた次のことも意味する。すなわち外的対象からの刺激が受容器に達し、それが神経繊維を通じて脳へ伝えられるといった、たんなる受動的過程ではなく、知覚主体が事物に働きかけることよつて初めて可能となるような能動的過程として、知覚を捉えることを意味するのである。

さて以上の点を確認した上で、ベルクソンの知覚論をギブソンのそれと比較し、両者に共通な枠組を素描してみたい。

二

ベルクソンと同じようにギブソンにとつても、知覚者が行動する

ということが、知覚の成立に欠かすことのできない条件である。彼はまず刺激が伝えられる径路と知覚系とを区別する。前者は受容器と脳の特定部位、および両者を結ぶ神経繊維から成る受動的な系である。これに対して彼の言う知覚系は受容器から脳に至る入力繊維だけでなく、逆に脳から受容器へと向う出力繊維をも含み、受容器（例えば眼）を動かす筋肉、眼の位置する頭部、頭部を支え環境の中を動き回る身体、これらすべてから成る能動的な活動系なのである。受動的な感覚径路に沿って伝わる刺激は外的対象ではなく受容器を特定する。したがってそのような刺激は外的対象についての「情報」を含まない。（ここで言う「情報」とは後述のように、言わゆる情報理論の扱う情報——すなわち記号、メッセージとしての情報ではないことに注意。）ギブソンはこのような刺激によってもたらされた受容器についての意識を「感覚」と呼び、それは外的対象についての情報をもたらさぬゆえに知覚の基礎ではないとする。これに対して知覚系は環境内を動き回ることによって、移り変わる光学的配列の中から不変項（invariants）を抽出する。この不変項こそギブソンの言う「情報」なのであり、知覚の基礎を成している対象を特定するのである。こうして彼は「感覚を基礎とした知覚」理論を退け、「情報を基礎とした知覚」理論を提唱する。不変項とは変化するものに対して、あるいは変化するものの中で変わらぬものである。それゆえ、不変項を抽出するためには視野の相貌を変えてみなければならぬ。（この意味で変化項と不変項は相補的である。）観察点を移動させることによって変化するのは、対象の特定に本質的なもので

はない。対象の特定に本質的なのは、異なる観察点に共通な不変項なのである。観察点を移動させることによって初めて不変項を、従って外的対象を特定することができる。このようにギブソンにとつて、不変項の抽出には知覚者の運動が不可欠の条件になっている。こうして可能的行動と現実的行動の差こそあれ、知覚者とは行動する知覚者であるという事実を知覚成立の基礎に置く点で、ベルクソンとギブソンは基本的枠組を共有していると言うことができる。

それだけではない。ベルクソンにとつて、われわれの知覚を構成するのは、外的対象のうちわれわれの利害にかかわる側面であった。ギブソンはこうした側面に關して、アフォーダンス（affordance）（これは動詞 afford へ「与える」の意）から作られた彼の造語である）という新しい概念を提唱している。これには環境が動物に与えるものという意が込められている。アフォーダンスは、動物種によって異なるが、環境内の事物が動物に対して持つ客観点「価値」や「意味」であるとされる。そして子供はまず「自分自身の行動に対する対象のアフォーダンスを知覚し始める」（EATY, 141）と述べられている。例えば、われわれにとつて陸地は「支えるもの」であり、牛にとつて草は「食べられるもの」であり、ある物質は「有毒である」というように、アフォーダンスは知覚者との、知覚者の行動との關係において決まる対象の特性なのである。このアフォーダンスという概念は、ベルクソンが可能的行動の「反射」について語ったことと、その内容を同じくすると思われる。すでに述べたように、われわれの身体は可能なくつかの進路の中から選択をすることができ

るという点で周囲のイマージュから区別されるものであった。

「そしてこれらの進路はおそらく、身体が周囲のイマージュから引き出すことのできる利益の多少によって身体に示唆されるのであらうから、これらのイマージュは何らかの仕方、私の身体に向けられた側面に、私の身体がそこから引き出しうるような利益をはっきりと示していなければならぬ。」(MM, 15)

「それゆえ、これら周囲のイマージュは、私の身体に対して、起こりうる身体の影響を鏡のように反射するのである。(…)私の身体を取り巻く対象は、それらに対する私の身体の可能的行動を反射するのである。」(MM, 15-16)

ベルクソンにとってもギブソンにとっても、対象の知覚がわれわれに示唆するのは、何よりもまず、われわれが対象から引き出しうる利害なのだ。そして、対象の利害がわれわれの行動と相関していることは言うまでもない。

以上のような基本的枠組を共有するベルクソンとギブソンが、知覚に関して他の論点もまた共有しているのは不思議ではない。彼らは視知覚を写真(事物の写し)のようなものとして捉えることに、そろって警告を発している。

「われわれを捉える問題の困難さはすべて、知覚を、事物を写真にとった眺めのように思い描くことに由来する。それは知覚器官という特殊な装置を使って一定の地点から取られ、次いでどういう風にしてか分らないが、脳髓の中で化学的・心理的仕上げの過程を経て現像されるというわけだ。」(MM, 35-36)

「誰もが当然のこととしてきた写真術と視知覚との誤まった類比から偽似問題が生じてくる。(…)眼とカメラを比較するだけでも十分誤解を招くものだが、網膜を写真フィルムと比較するのはずつとまずい。」(EAVP, 220)

彼らが主張しているのは、知覚が成立するためには物的対象とは別に知覚像——対象の写しであれ、対象を何らかの形で「変換」したものであれ——が生じる必要はないということなのである。知覚は心像、網膜像その他を基礎とし、それによって構成されているのではない。ベルクソンの知覚論がすべて行動の文脈で語られていたことが示すように、知覚の目的はまず環境に対する知覚者の適応行動を導くことである。それゆえ、この目的を果していれば、知覚風景は現にわれわれが見ているようなものである必要はないときえ言えるのだ。またこれもすでに述べたように、ベルクソンにとつて物質の知覚とは物質の存在に新たに付け加えられる何ものかではなく、反対にその存在の幾分かを捨象することによつてもたらされるものであった。この点からも、対象とは別の像を示唆するようなカメラと知覚との類比は、彼には受け入れられないものである。

この一般的論点は、網膜像と神経の特殊エネルギーに対する両者の態度に、より具体的に示されている。以下、これを順に検討してみたい。まず、網膜像に関してはその次に述べられている。

「人はふつう、網膜の錐体と桿体によつて受容された印象に対応する要素的感觉を想定している。人が視知覚を再構成しようとするのはこれらの感覺によつてなのだ。しかしまず、網膜は一つでは

なく二つある。それゆえ別々のものと思われる二つの感覚がどうやって一つの感覚に融合し、われわれが空間中の一点と呼ぶものに対応するのかを説明しなければならぬだろう。」(MM, 63)

「網膜像がそのまま伝えられたいとすれば、それに代わる唯一の仮説は、それが要素単位で、すなわち視神経繊維の信号によって伝えられるというものであると思われる。(…)しかし、それは私が感覚を基礎とする知覚論と呼んできたものの困難をすべて内に持っている。網膜上の光点と脳内の感覚との対応は、明るさと強度のそして色と波長の対応でしかありえない。そうだとすれば、脳は、明るさと色を異にする点から現象的環境を構成するという途方もない仕事に直面することになる。」(EAVP, 60-61)

ベルクソンによれば網膜の役割はただ刺激を受け取るだけのことであり、神経系の役割はこの刺激を既遂または未遂の運動に発展させることである。この神経系のどこにも、たとえ脳の中にも意識の中心があるのではない。刺激が受容され中枢に伝えられる道筋のどこにも、対象の「像」あるいはそれに代わるものが生じる必要はない。同じように、われわれは知覚において、対象からの刺激によって構成された「像を見る」のだという考え方を、ギブソンは「脳内の小人」理論と呼んで批判する。右に引用した、対象の像が神経系によって信号として伝えられるという考え方も、この理論から免れているわけではない。信号は翻訳され、解釈されなければならないが、脳はそのような課題を負うことはできないだろう、と言うのだ。ベルクソンにとってもギブソンにとっても、知覚とは何かがまず与

えられ、次いでそれを解釈するという過程ではないのである。

ギブソンの「情報」についての考え方も、こうした基本的立場を示すものである。彼の言う「情報」は情報理論で扱われる信号やメッセージではない。それは伝達されるもの、送り手と受け手から成るものではない。右に述べたように、知覚は、世界がわれわれに信号を送り、われわれがそれを解釈するような過程ではないのだ。「コミュニケーションの用語で知覚を説明することはできない」(EAVP, 63)。すでに述べた通り、「情報」とは変化する光学的配列の中にある不変項であり、環境を探索する知覚系がそれを抽出するのである。

知覚は心像その他によって媒介されるものではない、とする彼らの論点を示す二番目の例は「神経の特殊エネルギー説」である。この説はベルクソンの叙述に従えば「同じ神経に作用する異なった原因は同じ感覚を起こさせ、異なった神経に作用する同じ原因は異なった感覚を起こさせる」(MM, 50)と主張する。要するに、われわれの持つ感覚は、視神経、聴神経などの各種神経に特殊だということである。例えば、光の感覚は視神経を直接電気的または機械的に刺激することによっても得られる。同じ電気刺激を舌咽神経や聴神経に与えると、今度は味や音の感覚が得られる。ここから、われわれの感覚は物的対象の記号にすぎず、各感覚神経は外的刺激を固有の信号に変換し、それによって知覚を構成するという考え方を導き出すのは容易だろう。

ベルクソンはこうした法則そのものに疑問を投げかける。同じ感覚を生ずる異なった原因および異なった感覚を生ずる同じ原因と言

われているものは、電気刺激かあるいはそれを引き起こす機械的原因である。こうした一見同じように見える電気刺激の中には、実は異なった成分が含まれているのではないだろうか。もしそうだとすれば、各々の感官の役目は異なった成分を含む刺激の中から、利害に関わるものだけを抽出することになるだろう。従って、同じ原因は同じ感覚を、異なった原因は異なった感覚を生ぜしめることになり、神経の特殊エネルギーを想定する根拠はなくなる。(われわれがすでに一で見た、全体から利害関係のあるものを抜き出すというあの「選択」の考え方がここで取られているのは注目に値する。「選択」の内容が、電気的刺激に含まれている異なった成分の抽出という形で初めて具体的に示されているからである。)

ギブソンも感覚は知覚の基礎ではなく、知覚に付随的なものでしかないという自らの立場から、「特殊神経エネルギーの法則」を批判する。刺激された神経が引き起こす感覚の質を、われわれが意識することは十分ありうる。しかし、こうした意識は、われわれの環境についての意識とは別ものなのだ。というのも、能動的な知覚系は複数の受動的な感覚径路にわたるものであり、前者が環境から抽出する対象についての情報は、各種神経に特殊的な質から成るものではないからだ。(SCPS, 38, 55-56.)

網膜像を引き合いに出す知覚論や神経の特殊エネルギー説に共通するのは、われわれが直接意識できるのは外的刺激によって引き起こされたわれわれ自身の身体的または心的状態だけであり、知覚はこうした状態についての意識を素材として成り立っているという考

え方である。ベルクソンとギブソンが共に反対するのは、知覚のこのような捉え方なのだ。彼らにとつて、われわれの知覚を構成するのは事物の像や事物から運ばれてきたその代用物ではなく、事物そのもののある側面なのである。ベルクソンはそれを、イマージュの総体のうち可能的行動によって照らされたわれわれに利害関係のある側面という形で提示し、ギブソンは、われわれを取り巻く光学的配列から能動的知覚系によって抽出された、環境内の事物についての情報(不変項)という形で述べるのである。そしてどちらにとつても、事物のこうした側面を知覚するためには、知覚者は環境に働きかけ行動する存在でなければならぬ。こうした点でベルクソンとギブソンの知覚論は、その基本的枠組を共有していると言うことができるのである。

三

以上の基本的共通点を確認した上で、ベルクソンとギブソンの立場の相違について触れておきたい。それは各々の知覚論の特徴を一層よく浮彫りにするだろう。

ギブソンはわれわれを取り巻く環境が絶えず変化し流動するものであることを強調する。

「どんな刺激配置も、眠っているまたは意識のない観察者の場合を除いて、どんな時間の長さであれ凝固しているものではない。(…)従って変化しない刺激パターンという観念は実現されない抽象で

あり、点的刺激の恒常的集合というずっと抽象的な観念は神話である⁽⁶⁰⁾」

言うまでもなく、このような考え方はベルクソンにはすでにおなじみのものである。彼にとって「変化はいたるところにある」(MN, 234)のであって、静止した対象の同じ側面を同じ角度から見ている場合でさえ、この事情に変わりはない(EG, 2)。この変化の普遍性の最も生き生きした叙述は「変化の知覚」のうちに見出すことができる。そこでは、変化の底にあって変化を支える不変の対象とは実用のための抽象であるとされ、このような不変の基体が必要としない純粹な変化の知覚の範例が、メロデーを聴く体験に求められる(PM, 164)。

われわれの知覚風景が不斷に変化することについては、以上のようにベルクソンとギブソンに一致が見られるが、変化するものと変化しないものとの関係については両者は見解を異にする。ベルクソンにおいては、絶えず流動し変化する全体から凝固した不変の対象を裁断する、という考え方が根本にある。ここでは、変化と変化しないものが対立するものとして捉えられている。言うまでもなく、彼にとって実在を構成するのは変化の方であり、不動不変の対象は真の実在を把握するためには振り捨てなければならない習慣の産物なのである。これに対してギブソンにおいては、変化項と不変項は相補的に捉えられている。環境の中から不変項を抽出するには変化が必要なのだ。彼は変化とはあるものから別のものへの唐突な、全面的な転換ではないことを強調する。「ある配置は視点の移動によつ

て完全に別の配置になるのではない」(EAVP, 73)。光学的配列の中には変化する側面とそうでない側面があるのだ。そして不変項は変化によつて初めて明らかにされるのである。光学的配列の中で何が変化するものであるかが分らなければ、何が変化しないものであるかを知ることができない。「構造における不変項は変化項との関係抜きには存在しえない」(EAVP, 84)。(この点でも知覚者が行動する存在であることが不可欠になる。)

ベルクソンには変化を通じて初めて明らかにされる不変構造という洞察はなかったようである。ギブソンはベルクソンと同じく「空間を時間から切り離し、空間中の凝固した形の集合を想像する幾何学的習慣」(EAVP, 74)を批判する。しかし、それは不変項がそのような変化を通じて特定されるものであるからこそなのだ。

このような相違にもかかわらず、ベルクソンとギブソンの知覚論がその基本的枠組を共有しているという事実に変わりはない。彼らが共に主張する命題は「知覚とは能動的な知覚者(知覚系)が環境から抽出する、知覚者の利害にかかわる側面である」と表現できるだろう。

四

最後にベルクソンやギブソンのような型の知覚論が、哲学的な知覚論に対してどのような意味を持つかを探ってみよう。

第一に、通常、視知覚における因果系列とされているものが果し

て十分なものであるかどうか、彼らの立場から問われるだろう。普通、視覚における因果系列として挙げられるのは、対象に始まり、そこからの光が網膜を刺激し、その刺激が視神経によって大脳の感覚中枢に伝えられるというひとまとまりの連鎖である。しかし、ベルクソンもギブソンも共に重要視するのは、この連鎖をさらに先へと延長することなのである。

「では何が必要とされているのだろうか。(…)ただ、最初選んだ道が続いて進むことだ。諸君は外的イマジユが感官に達し、神経を変様させ、その影響を脳に伝えることを明らかにしたのである。果てまで進めばよいのだ。運動は脳髓を通過しようとするだろうが、そこで一時留まったにちがひなく、それから有意的行動へと展開するのだろうか。」(MMI, 38)

「われわれは視覚を知覚系として考えることができる。脳はその系の一部にすぎない。眼もまたこの系の一部である。網膜への入力には眼球調節作用をもたらし、それが今度は網膜入力を変えるからだ。その過程は一方的ではなく円環的なのである。」(EAVP, 61)

言うまでもなく、彼らの立場は知覚における因果系列を否定するものではない。それどころか、因果系列の終端である脳の状態からいかにして事物の知覚が生じるのか、といった因果説に対する無用な反論から因果説を救うものであると言える。因果系列が示唆するのは、脳状態が原因となり、その結果として事物の知覚が「生じる」ということではない。しかし、脳の感覚中枢を終端とするような因

果系列の提示の仕方にも、こうした誤解を招いた一因があるように思える。実際には因果系列は感覚中枢で終わりになるのではなく、そこからさらに遠心性神経を介して末梢にまで続いているのである。この系列が示唆するのは、脳を中心とする神経系は事物の像を「生み出す」ためにあるのではなく、環境に対するわれわれの有効な行動を導くためにある、ということなのだ。感覚中枢に伝わった刺激は末梢へと送り返され、事物に対するわれわれのある態度を生み出し、それが刺激に変化を生じ、この変化がまた態度の変更を促す——知覚はこうした循環的過程であると言える。われわれが知覚するのはこうした過程を通じて、行動に照らされた事物の側面（ベルクソンの「反射」、ギブソンの「アフォーダンス」）なのだ。これはつまり、知覚とは「対象そのものの何ものかである他はない」(MMI, 257)と云うことなのである。

第二の論点は、彼らの知覚論がわれわれの認識よりも、もっぱら行動にかかわる用語によって説かれている点に求められる。彼らとは反対に、知覚における認識過程の役割を重視する知覚論は多い。例えばハムリンは、Xであるとはどういうことかについて何らかの観念を持つていなければ、あるものをXとして見ることはできないと言う。これに対してベルクソンやギブソンの立場からは、ではそのようなXという観念は、知覚によらないとすればどのように獲得されたのか、と問うことができるだろう。彼らは、知覚において言語の果す役割よりも行動の果す役割の方を強調する。つまり、知覚の自然的基礎をより重視する立場であると言える。彼らは、通

常は言語に浸透されているわれわれの知覚の基底に、このような自然的基礎が存在することにわれわれの注意を喚起するのである。

第三に、このように行動を強調する彼らの知覚論は、真正の知覚と錯覚との区別に有効な基準を提供してくれる。もともとヘルクソンが知覚における行動の役割を強調したのは、知覚と記憶の「本性の相違」を指摘するためであった。彼にとって記憶とは「もはや働かぬもの」、行動の文脈からはずれているものであるゆえに、可能的行動によって説明される知覚とは本性上異なるものである。そして錯覚や幻覚、夢（一口に言って不在の対象の表象）には、純粹な内的状態である記憶が主役を演じているのであり、反対に知覚においてはわれわれは可能的行動によって外的対象の實在に触れているとされる。同じ事柄をギブソンはさらに具体的に明らかにしてくれる。彼にとって知覚とは、知覚系の活動によって環境から抽出された情報であった。従って、心像とはこうした知覚系の活動が適用できないものなのである。外的対象と違って心像は、注視するとより鮮明になったり、目を寄せると二重になったりするものではなく、その輪郭を走査することもできないようなものだ。「最も決定的な現実性テストは、精査活動によって新しい特徴や細部を発見できるかどうかである。」(EAVP, 357.)

ヘルクソンやギブソンによる行動の観点から捉えられた知覚の理論は、もちろんまだ完全なものではない。例えばギブソンの言う不変更の内容はさらに練り上げる必要がある。ギブソン自身が明言しているように、「不変項の研究は今始まったばかりなのである」(EAVP, 311)。

また、こうした行動を中心とした知覚論は知覚の自然的基礎を強調する正にそのゆえに、知覚における認識過程の役割までも同じやり方で説明することはできないだろう。問題はどちらか一方で知覚を説明し尽そうとすることではなく、それぞれの限界を定めることであると思われる。その見究めは今後に委ねられている。

引用略号は以下の通り。

ヘルクソンの著作

(MM) *Matière et mémoire*, 1896, 92e édition, P.U.F., 1968.

(EC) *L'Evolution créatrice*, 1907, 142e édition, P.U.F., 1969.

(PM) *La Pensée et le mouvant*, 1938, 91e édition, P.U.F., 1975.

ギブソンの著作

(SCPS) *The Senses Considered as Perceptual Systems*, Houghton

Mifflin Company, 1966.

(EAVP) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton

Mifflin Company, 1979.

注

(1) ヘルクソンやギブソン以外には次の二つが挙げられる。

Merleau-Ponty, M. *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, pp. 241-249.

黒田 亘「知覚と動作」、『知識と行為』東大出版会、一九八三年所収。

(2) J・J・ギブソン（一九〇四—一九七九）はアメリカの知覚心理学者である。彼は最初、興行知覚の実験的研究に携っていたが、その過程で従来の知覚理論の不備を痛感し、独自の「生態学的視覚論」を提唱するに至る。

った。彼の経歴については、EAVPの邦訳書『生態学的視覚論』（古崎敬、古崎愛子、辻敬一郎、村瀬曼Ⅱ共訳、サイエンス社、一九八五年）の「解説」に、辻敬一郎氏の簡潔な叙述がある。

また彼の生態学的アプローチは構成主義的アプローチと対置される、現代知覚心理学の二つの潮流であり、ギブソンアンと呼ばれる彼の多くの弟子達と構成主義者達の間で活発な論戦が続けられている。両者の対立点は次の論文に整理されている。

Reed, E. S. and Jones, R. K., 'James Gibson's Ecological Revolution in Psychology', *Philosophy of the Social Sciences* (1979), pp. 189-204.

さらに、知覚をめぐる最近の哲学的論点を整理した左記の論文に、ギブソンの理論が一節をさして紹介されている。

Edmond Wright, 'Recent Work in Perception', *American Philosophical Quarterly*, (1984), pp. 17-30.

- (3) 「イマーヂュ」という語については「事物と表象の中間にある存在」というヘルクソン自身の簡潔な規定があるが、この語はことさら特定の哲学上の立場を代表するものではないとするのが、ヘルクソンの真意にかなっていると思われる。『物質と記憶』の冒頭で、哲学的論争を一切知らない人の立場に身を置くと、われわれは感官を開けば知覚され閉ざせば認められないイマーヂュ、しかも自然法則に従って作用し反作用し合っているイマーヂュを前にしているとされるからだ。要するにイマーヂュとは——實在論が主張する色も匂いも味もない事物ではなく——常識の立場の言う、感覺性質を備えた「もの」なのである。

- (4) 注意やあらかじめ持っている知識や文脈などによって、対象のある側面に気づいたり気づかなかつたりすることがある。しかしここで言われているのは、そのような個人的な認知の問題ではない。およそ知覚しうるものが、事物のある限定された側面だと言われているのである。

- (5) 例としては、面の傾き、対象の介在によって隠される肌理の量、地平線、肌理の密度または勾配などが挙げられている。

- (6) *MM*, pp. 50-52.

- (7) この点からも「イマーヂュ」という語には注意を要する。それは少な

くとも知覚の場面においては、決して「心像」の意に解してはならない。またギブソンは、自らの立場が直接的實在論または素朴實在論を採用する新しい理由をもたらしとしてゐる。次を参照。

New Reasons for Realism', *Synthese*, 17 (1967), pp. 162-172.

- (8) *ibid.* p.165.

- (9) Hamlyn, D. W., *Perception, Learning and the Self*, Routledge & Kegan Paul, 1983, p.39.

- (10) これはギブソンニマンでもリードとジョーンズによつて実際に為された反論である。次を参照。

Reed, E. & Jones, R., 'Gibson's Theory of Perception: A Case of Hasty Epistemologizing?', *Philosophy of Science*, 45 (1978), p. 526.